

第1回専門部会 議事録

平成27年11月20日（金）18時00分～

登別市市民活動センター のぼりん 2階 市民活動室A

- ◆出席委員：松山 哲男 会長
齋藤 正史 副会長
高田 明人 委員
川田 弘教 委員
守屋 聡 委員
近井 一夫 委員
吉元 美穂 委員
垣内 登紀子 委員
安達 陽子 委員
伊奈 綾 委員
千葉 洋子 委員
二瓶 秀幸 委員
米田 登美子 委員
井上 昭人 委員
寺島 真一郎 委員
井元 耕 委員
岩崎 隆二 委員
佐野 亮二 委員
米澤 厚 委員
横内 智治 委員
合田 富重 委員
岩崎 隆二 委員
小川 賢 委員

計23名

- ◆事務局：商工労政グループ宍戸商工労政・新エネルギー主幹
奥田主査
竹中担当員

- ◆講師：株式会社アムリプラザ 代表取締役 岡山 洋一 氏
企画プランナー 丸山 宏昌 氏

- ◆議題：（1）各専門部会が取り組む取組事例の洗い出し及び検討テーマの設定について
（2）専門部会が取り組むべき今後の協議と進行方法について

【要旨】

項目	発言者	内容
	事務局	<p>ご多忙のところお集まり頂き、ありがとうございます。第1回専門部会を開催いたします。</p>
	会長	<p>今日の会議では、【人・企業・地域】の各専門部会に分かれていただき、取り組み事例の洗い出しを行って頂くとともに、専門家の方から具体的な事業の構築方法について話を伺う。</p>
		<p>今後、それぞれの部会で検討すべき具体的な事業が決定した段階において、5W2Hの考え方に基づく具体的な事業内容の協議を進めていきたいと考えているため、まずは、実際にどの事業を取り組むべきかを決定することを念頭に置き、各部会が取り組みたい事業を話し合ってもらいたい。</p> <p>(グループワーク終了後)</p>
	会長	<p>時間となったので、各部会の話し合いを終了し、専門家から具体的な事業の構築方法について話を伺う。</p>
	講師	<p>よろしくお願い致します。</p>
		<p>まずは、先程各部会で話し合われた内容を全体に伝える時間を設ける。代表者は発表願いたい。</p>
	委員	<p>【人カテゴリー】</p> <p>地域の子供からお年寄りまで、地域に愛される交流の場や、地域住民と観光客の交流の場が必要であることから、複合型の機能を持つ交流の拠点となる施設を整備する。また、施設を円滑に運営し続ける仕組みの整備や人材の育成策も構築していく。</p>
	委員	<p>【企業カテゴリー】</p> <p>登別では、地域の企業・物・情報が『縦割り』で動いてしまっている。これがネットワークとなって繋がっていけば、相乗効果が生まれ、より活かされるのではないかと考える。このような繋がりをプロデュースするために、商工会議所、行政、その他各業界団体や市民が総参加の下、“オール登別”による新たな仕組み・ネットワークを構築す</p>

委員

る。

【地域カテゴリー】

人やカネ、物など様々なものを対象に『循環』をキーワードとすることで、市内全体に経済効果をもたらす取り組みを考えていける。循環型のバスを市内に回遊させ、登別温泉に来る観光客を市内に循環させるなどの仕組みを整備し、経済活性化に繋げていく。

講師

このように各部会で具体的な協議が始まったところかと思うが、本日は、このような協議の場における、話し合いのコツや会議進行のコツをお伝えしたい。

各専門部会で具体的な事業を考えていくにあたり、今までの進捗状況としては、大事な視点や価値観が炙り出されてきたところだと思う。また、各個別事業ではなく、総合的なコンセプトやキーワードが出ていると思う。

今後はコンセプトに沿った事業を考えていく段階に移るが、これから事業を考えていくときに大事な視点に、“拡散思考”と“収束思考”という考え方があある。ポイントは「拡散」と「収束」を分けて考えるということである。

「拡散」は、内容の良し悪しを問わず、アイデアをまず広げ、出てきた中から絞っていくという考えである。10個のアイデアから1つを搾るというよりも、100個から1つを搾った方が、より良いアイデアになる。拡散思考の中でも、量を沢山出す時に大切な思考方法として“ゼロベース思考”と言うものがある。ゼロベースとは、聖域を設けない、1度考えをゼロにするということである。「これはできるから」、「これはできないから」という仕組みをいったん外すという事である。制約を設けず、量を出すということに集中する。このような流れを「拡散」という。

一方、「収束」は沢山出されたアイデアの絞り込みを行うことである。絞り込みを行う際に大切

な思考方法として“仮説思考”がある。仮説思考とは、仮説を立て、その前提の中で進めていくという考え方である。仮説を立てなければ、協議に収集が付かなくなってしまう。仮説はあくまでも仮説であり、そこにこだわる必要はないが、ある程度の方向性を示す。このような流れを「収束」という。

私は、札幌にある商店街の活性化策を検討する場に関わった経験を持つ。商店街だけではなく、NPOや町内会の人達が集まり、商店街が地域の為に何が出来るか、そのための事業を考えた。その時に活用した考え方、視点として、検討テーマや事業を考える際に用いる3つの視点について話していく。

まず、「自分達がやりたいか」を考える。商店街の話をするが、NPOの人たちは商店街直接関係ない。だが、商店街という場を使ってNPOにできる、NPOがやりたいと思う事は何だろうかいうことをどんどん出していく。

次に、「自分達だけで出来る事なのか」を考える。自分達だけで出来なければ、誰を巻き込めば実現が可能になるのかを考える。

最後に、「それは本当に必要なことか」を考える。この3つの視点が重なる部分（強くやりたいと思うこと、それが出来ること、なおかつそれが本当に必要なこと）に位置する事業であれば、取り組む事業として選定されるべきものだろう。札幌の商店街活性化策を考えた際に、この3つの視点を重要視しながら検討を進めた。

特に、「自分達がやりたいか」が重要な要素である。やりたいと思うエネルギーがなければ、いくら本当に必要なことでも、周囲の方が精力的に活動してくれない。このように、多くの事業案を挙げてみたときに、一つ一つの事業を3つの視点から考えてみる事が大切である。

ある程度事業が特定されたとき、その事業をど

のように進めていくかという話に触れたいと思う。今回の事業提案の際にあてはめることが出来るかどうかはわからないが、一般的に自治体が事業を検討する際の評価基準として用いられるいくつかの指標を参考として皆様に配布する。皆様は今後、専門部会の中で5W2H（いつ、どこで、だれが、なにを、なぜ、どのように、どのくらい）の応用による具体的事業の実現に係る協議を予定していると伺っている。この5W2Hの基準をより細分化したものである。

例えば、「いつ」とは、具現化するまでの期間を考えると、具現化したという状態としての『目標』が定まっていなければならない。

「どのくらい」とは、どの程度の予算の範囲でこの事業を進めるのかを明確にすることが求められている。

「だれが」とは、市・連合体など、どこが運営主体となるのが望ましいのかはっきりさせていく必要がある。

「何を」とは、具体的にどのような事業を行うのか、事業の詳細を詰めていく必要がある。

「なぜ」とは、コンセプトと深い関連性があるが、協議する事業の背景や取り組む必要性・理由であり、説明責任を指す重要な項目である。なぜこれを選んだのか。「このような効果が期待できるから」という明確な理由を掲げる必要がある。

「どのように」とは、協議する事業を具体化する為の手法、理解者・協力者への周知と確保、財源措置の確保について議論する。この財源措置を積み上げではなく、いくらすべき事業かという逆の視点から考える必要がある。

これらの事項に留意の上、5W2Hを考えていくと良いだろう。

この様に、評価基準などを用いてこれから事業を具体化させていく上で、アイデアを絞り込んでいく作業は非常に難しいものになっていくだろう。

う。そんな中で、話し合いがうまくまとまるように議論を行っていく方法についても少し話そうと思う。

話し合いがうまくいかない最も重要な要因は、今会議で話されている内容が「見えていない」ことである。話し合いが見えるようするためには、模造紙やホワイトボードを活用することが効果的である。議論を『見える化』することで、①議論のポイントがわかる②発言を発言者から切り離す③共通の記録として残る この3点が可能となるため、議論の『見える化』を心掛けるとよい。

また、会議が終了する際に、会議の内容とは区分して、今回の会議の進め方について良かった点・悪かった点を振り返る時間を作ることをおすすめする。

このようなポイントをおさえながら会議を進めていくと、目的達成に向けて円滑に進展していくのではないかと思う。協議会における協議の場はもとより、職場の会議などでも活用してみてもいいかだろうか。

本日はこれで終了します。ありがとうございました。